

SSTR2026 AWARD レポート部門

ゼッケン：1

本文

SSTR2026 は、私にとって特別な節目の大会となった。

プレミアム開催を除けば、今年でちょうど 10 回目の参加。そして、昨年から導入された参加回数によるゼッケンカラー制度で、10 回以上参加者に与えられる「赤ゼッケン」を、今年初めて身に着けることになった。

さらに今年は、もう一つ大きな出来事があった。

偶然にも、ゼッケン番号「1 番」を獲得できたのである。

年々参加者が増える中、「SSTR はエントリーから始まっている」と言われるようになった。

本戦よりエントリーの方が難しい、と冗談半分に語られるほどで、JR の人気列車チケット争奪戦のような早打ちをしなければ参加すら危うい。そんな状況の中で、10 回目という節目の年にゼッケン 1 番を手にしたことは、本当に幸運だった。

「今年の運を全部使い切ったのではないか」と思うほどだった。

私が初めて SSTR に参加したのは 2017 年だった。

雑誌か何かで大会を知った友人に誘われたことがきっかけである。

もともと私は、神社仏閣や城郭などの史跡を巡ったり、日本各地の半島の先端を目指したりすることが好きでバイクに乗り始めた。そのため、SSTR 以前から長距離ツーリングそのものには慣れていた。

千里浜なぎさドライブウェイも過去に訪れたことがあったし、海外ではフロリダのデイトナビーチのような「バイクで走れる砂浜」にも行ったことがある。

距離そのものは、それまで全国を走り回っていた自分にとって特別長いものではなかった。

それでも、私が **SSTR** に強く惹かれた理由は、その唯一無二のコンセプトにあった。

「太平洋で日の出を見て、太陽を追いかけ、その日の夕陽を千里浜で迎える」

この発想に、私は強く惹かれた。

主催者である風間深志氏についても、当時はパリ・ダカルラリーの名前を知っている程度で、詳しく理解していたわけではなかった。

しかし、風間氏が「ダカルで見た夕陽を、多くの人にも体験してほしい」と語っていた“夕陽”というキーワードは、不思議と私の心に深く刺さった。

私は北海道出身である。

日本海沿いを走るオロロンラインでは、晴れた日に美しい夕陽が海へ沈んでいく。北海道在住時代、何度もその夕陽を見に車を走らせた。冬の雪事情もあり当時はバイクには乗っていなかったが、あの景色は今でも強く心に残っている。

そして能登には、私自身の縁もあった。

母方祖父の先祖は、江戸時代に加賀藩士として能登に暮らしていた郷士だったらしい。そんな先祖ゆかりの土地・千里浜で夕陽を見ということに、私は大きな浪漫を感じた。

幸い、初参加となった **2017** 年大会では、千里浜で美しい夕陽を眺めることができた。

その瞬間、「また来年も参加しよう」と自然に思った。

それからの10年間、友人家族とのマスツーリング、妻とのタンデム、自分一人での参加など、さまざまな形でSSTRを走ってきた。

もちろん毎年が完璧だったわけではない。土砂降りに遭ったこともあるし、バイクが故障して新幹線で帰宅した年もあった。

それでも、すべてが良い思い出になっている。

ただ、快晴の朝日と、千里浜の美しい夕陽をセットで見ることができた年は、10年間で一度しかなかった。

自然相手なので運に左右される部分は大きい。だが、だからこそ「もう一度あの完璧なSSTRを体験したい」という思いが生まれ、また翌年のエントリーに向かわせるのだと思う。

そして、10年も参加していると、SSTRは単なるイベントではなく、人との縁を繋ぐ場所にもなっていく。



一人との出会いが、さらに新しい出会いへと繋がっていく。

そんな縁の広がりも、**SSTR** の大きな魅力だと思う。

夕陽との縁。

人との縁。

そして、能登との縁。

さまざまな縁が繋がった結果として、今の自分がここにいるのだと思う。

この先、千里浜がいつまで今の姿を保てるのかもわからない。

SSTR も、いつまでも続くとは限らない。

だからこそ、縁あって繋がることができたこの大会と能登との関係を、これからも大切にしていきたいと思う。

来年は **15** 回大会。

記念すべき節目の年になるはずだ。

もちろん、来年もゼッケン **1** 番を目指して（笑）、エントリー当日は気合いを入れて早起しようと思っている。

10 周年大会で風間さんは「次の **10** 年」という言葉を口にしていた。

20 周年大会で「**10** 年勤続章」のようなものがあるのかは分からないが、もしあるなら、ぜひそこを目指してみたい。

そのためにも、地元石川県の方々から「もうバイク乗りは勘弁してくれ」と思われるようなことがないよう、これからもジェントルな走りと安全運転を心掛けて参加し続けたいと思う。



ゼッケン1番は目立つ。

だからこそ、常に誰かに見られているという意識を持ち、一挙手一投足まで模範的なライダーでありたいと思って走った。

その結果、今年も無事故・無違反で無事に走り切ることができた。

千里浜よ、また来年。

我が心の故郷であり、祖先ゆかりの地。

また来年、その夕陽に会いに行きたい。